

まして、また、長井市における指定管理者制度の評価では、指定管理期間満了時に次期指定管理体制に改善を反映できるようなPDCAサイクルを構築することを目的とした評価として、指定管理者自身、また、所管する担当課、あと、第三者機関による評価を行うこととしております。この第三者評価におきましては、長井市遊びと学びの交流施設設置条例第17条におけます外部委員12名によります運営協議会を設置していますので、そちらにおいて行うことを想定しております。この協議会につきましては、指定管理者が行う交流施設の運営に関すること、事業計画に関すること、その他必要な事業に関することを協議することとしておりまして、現段階では年2回、協議会を開催する予定であります。また、協議会の議事内容につきましては、ホームページ等で掲載しながら公開していきたいと考えております。指定管理者制度の中で、外部評価を行いながら、運用面に生かしていきたいと考えております。

○平 進介委員長 2番、勝見英一朗委員。

○2番 勝見英一朗委員 今のお話ですと、目標を設定された上で、第三者的な評価を行って、公表されるというふうには受け止めましたけれども、そのように捉えてよろしいでしょうか。

○平 進介委員長 新野弘明地域づくり推進課長。

○新野弘明地域づくり推進課長 指定管理者が決定してから、事業計画書作る段階で、一緒にこちらも入って計画書を作ります。その事業内容ごとに具体的な想定される事業内容であったり、あとは、例えば数字的なところを事業計画書の中にある程度盛り込める部分につきましては、事業計画に基づいて、年度終了後に事業報告をいただきますので、その段階で、その内容を点検といいますか、お互いに確認しながら進めていきたいと思っております。それに基づきまして、運営協議会のほうに諮りながら、評価をしていくような形になればと思います。

○平 進介委員長 2番、勝見英一朗委員。

○2番 勝見英一朗委員 今のお考えの確認いたしました。その中で、できるだけ具体的に示していただきたいというのが私の気持ちです。以上で質問終わります。

○平 進介委員長 ここで暫時休憩いたします。再開は午後1時といたします。

午前11時57分 休憩

午後1時00分 再開

○平 進介委員長 休憩前に復し、会議を再開いたします。

総括質疑を続行いたします。

### 鈴木富美子委員の総括質疑

○平 進介委員長 次に、順位2番、議席番号10番、鈴木富美子委員。

○10番 鈴木富美子委員 清和長井の鈴木富美子です。

このたびの予算総括質疑は、致芳小学校北側2階校舎に学童クラブが設置される事業が提案されています。以前、西根小学校空き教室に学童クラブを設置したとき、私はとても違和感を覚えました。学校は学校、学童は学童。昇降口から一旦下校して、学童クラブの玄関から入る。遊ぶ場として体育館を使用するにも、一旦外に出てから使用するなど、学校と学童クラブには大きな壁があったように記憶しております。今回の致芳小学校校舎内の学童クラブの設置は、学校と子育ての壁をなくし、共に見守る体制をつくることは、市長が施政方針で訴えているダイバーシティ、インクルージョン社会を進める

上で大変価値のある事業だと思います。この事業がより共生社会のモデルになることを願い、以下、質問をいたします。

3款民生費、2項児童福祉費、3目児童センター費、005学童クラブ整備事業工事請負費についてお聞きいたします。

初めに、現在、致芳児童センター内で学童クラブを開設していますが、学童保育利用希望者の受皿を増やすため、致芳小学校空き教室を整備し、移設するとお聞きしました。学童クラブの事業と学校とはすみ分けしてきた経過からすると、思い切った方向転換だと感じますが、今回の移設にはどんな経過があったのか、子育て推進課長にお聞きいたします。

○平 進介委員長 鈴木幸浩子育て推進課長。

○鈴木幸浩子育て推進課長 現在、長井市では7か所の学童クラブで放課後の児童をお預かりしております。7か所の内訳でございますが、平野、伊佐沢、豊田の3つの学童クラブにつきましては、それぞれ専用の建物を整備し、その開設を行っております。また、中央南学童については、中央児童センターを利用し、中央北と西根の2つの学童クラブについては、それぞれ長井小学校と西根小学校の空き教室を利用して開設を行っております。

致芳学童クラブにつきましては、致芳児童センターの空き保育室を利用して実施してまいりましたが、近年は低学年の児童だけではなく、たくさんの利用希望があり、定員を超える児童をお預かりしている状況でございます。このような中、新型コロナウイルス感染症の流行による、その密を避けるため、小学校側のほうから一時避難的に小学校の施設を利用しまして開設するご提案をいただき、今年度の4月から小学校の多目的室を中心に学童クラブを実施しております。その開設及び実際の使用に伴う協議を進める中で、学校内の空き教室を利用した開設について、現在まで協議、検討を進め、来年度

の整備を行うべく、その予算についてこのたびご提案をさせていただいているものでございます。

○平 進介委員長 10番、鈴木富美子委員。

○10番 鈴木富美子委員 学童クラブの設置なのですが、致芳小学校2階に設置するとお聞きしていますが、空き教室とお話がありましたけれども、2階であるために、保護者の送迎など、校舎に立ち入る際の動線などの課題はなかったのか、子育て推進課長にお聞きいたします。

○平 進介委員長 鈴木幸浩子育て推進課長。

○鈴木幸浩子育て推進課長 小学校を利用するに当たりましては、現在の学校生活への影響をできるだけ少なくするため、あくまでも空き教室の利用が大原則となり、学校側と協議を重ね、現在使用していない北校舎の2階部分を利用することといたしました。なお、北校舎の2階を利用することにより、同じフロアに存在する図書室であったり、家庭科室、また、1階西側にある多目的室などもその空き状況に応じた利用について協議を行っているところでございます。

児童の送迎につきましては、現時点での想定では、学童クラブの支援員が昇降口まで付き添いまして、保護者への引渡しを行うこととしております。

○平 進介委員長 10番、鈴木富美子委員。

○10番 鈴木富美子委員 いろいろ協議をなされた上での選択肢だと思います。

工事の内容について、これからお聞きしたいと思います。

電気設備工事、機械設備工事ですが、今までエアコンは教室に設置されていなかったのかどうか、お聞きしたいと思います。あと、もしあれば、形状が違うエアコンを設置するのか、お伺いいたします。また、Wi-Fi設置工事のネットワーク機器関係となっておりますが、Wi-Fiが必要な理由もお聞きしたいと思います。子育て推進課長、お願いいたします。

○平 進介委員長 鈴木幸浩子育て推進課長。

○鈴木幸浩子育て推進課長 学校には、平成28年度にエアコンが設置されておりますけれども、このたび学童クラブとして利用を想定している教室につきましては、当時から空き教室になっておりましたので、エアコンの設置がなされていない状況でございます。このたび学童クラブとして利用するに当たりまして、夏休みの期間やその前後の利用のため、エアコンは必要不可欠でありまして、その整備を計画しているところでございます。なお、エアコンの製品や形状につきましては、予算のご承認をいただいた後に具体的な検討に着手をいたしますけれども、先に設置しているエアコンの機種などを基本としまして、その性能と経済性を考慮し、適切なものを設置してまいりたいというふうに考えてございます。

Wi-Fiの工事でございますが、現在全ての小・中学生にタブレット型PC、パソコンが配付されておりまして、それを活用した学習が行われておりますので、放課後の自主学習や宿題にも対応すべく、そのネットワーク関連機器の整備を行うものでございます。

○平 進介委員長 10番、鈴木富美子委員。

○10番 鈴木富美子委員 やっぱりWi-Fi設置は必要不可欠なものだと、タブレットがある以上は、そういうふうに思いますけれども、何か宿題のためのという感じもしないでもないので、その辺の使い方をしっかりと確認した上でしていただきたいと思いますが、その点はどのようにする予定でいらっしゃるか、お聞きいたします。

○平 進介委員長 鈴木幸浩子育て推進課長。

○鈴木幸浩子育て推進課長 基本的には、あくまでも学習の一環といいますか、宿題の対応というふうなところでの活用のみというふうなことで現在考えておりますけれども、今後、学校でのタブレットの使い方に沿いまして、こちらのほ

うでも必要に応じて、そこの辺は順次柔軟に対応していきたいというふうに考えているところでございます。

○平 進介委員長 10番、鈴木富美子委員。

○10番 鈴木富美子委員 分かりました。

次に、電気錠システム設置工事についてお聞きいたします。

昇降口には、カメラ付子機、電磁ロック、操作表示機、2階の教室には、モニター付親機、ワイヤレス子機、電気錠制御盤、職員室には、操作表示機、何となく物々しい機器を設置するように、私的には考えております。また、子供たちがどのようにして入り、退室するのか、常に担当が確認するのか、また、教室以外、例えばトイレなどの対応はどのようにしていくのか、子育て推進課長にお伺いいたします。

○平 進介委員長 鈴木幸浩子育て推進課長。

○鈴木幸浩子育て推進課長 電子錠システムにつきましても、エアコンと同様に、今後具体的な検討を進めてまいりますけれども、学校の一部を学童クラブとして利用するに当たりまして、児童の保護者など、学校への訪問機会が増えることもありまして、防犯と安全対策の両面から不特定多数の学校への出入りを防ぐため、昇降口に施錠を行うべく、計画しているものでございます。なお、昇降口には、カメラ付きのインターホンを設置しまして、学校や学童クラブの来訪者があった場合に、遠隔操作による開錠が可能となるよう、電気錠を整備する予定としております。

保護者のお迎え時の対応につきましては、お迎えに来た保護者にインターホンを使ってその旨、ご連絡をいただきまして、モニターにて確認をして、学童支援員がその子供と共に昇降口まで移動しまして、保護者への引渡しを行うことを想定しております。なお、電気錠は、昇降口のみを設置するものでございまして、教室間やトイレ、多目的室等への移動は自由に行う

ことができます。

今後、小学校において実際に学童クラブとしての利用を行うに当たり、その都度、その動線等の確認と検証を行いまして、支援員同士、または学校職員とも情報の交換と共有を行い、より確実に安全な利用が可能となるよう研修も実施してまいりたいというふうに考えてございます。

○平 進介委員長 10番、鈴木富美子委員。

○10番 鈴木富美子委員 工事内容につきましては、これから予算がついた上で、また検討なさるとのことなので、ぜひ使いやすい、また、しっかりした安全対策になるようにお願いしたいと思います。

続きまして、市内には、先ほど学童クラブが7か所あるとお聞きしました。子育て推進課が運営しているのと、あと、長井市福祉協議会が運営しているところがありますが、現在、先ほどあったように、学校内の空き教室をしているのが西根小学校と長井小学校ということでした。西根小学校は、先ほど言ったように、学童クラブは一旦玄関から下校して、学童の入り口を新たに設置した。長井小学校の中央北学童も一旦外に出てから、学校に入るという形になってます。致芳小学校に関する学童クラブは、これまでと違いまして、同じ校舎内で分け隔てなく、児童にとっては移動や利用が分かりやすくなり、学校と学童クラブとの距離が近くなったように感じます。しかし、今までは、学童クラブを利用している児童は、本来学校の先生方の手を離れていたのが、引き続き学校内で学童が行われることで、先生方も何かしら校内の管理の面で気遣いが出てくるのではないかと思います。

今回の移転を進める上で、小学校の先生方の業務面で様々な課題があるのではないかと思います。例えば使用する教室の清掃や低学年の授業が終わって高学年の授業が終わっていない場合、子供たちの声が邪魔にならないかなど、ど

のようなことが議論され、どのように対応されるのか、責任分担として曖昧なところはないのか、教育長にお伺いいたします。

○平 進介委員長 土屋正人教育長。

○土屋正人教育長 今年度の施政方針のキーワードに多様性と共生社会が掲げられました。教育委員会では、令和5年度学校教育の重点の中に、自他の違いを認め合う特別支援教育の視点に立った学校づくり、それから、コミュニティ・スクールから学校をコミュニティの核にしたスクール・コミュニティの推進を上げています。ここで貫いているのは、子供を真ん中に置いて、その子供を学校、保護者、地域が総がかりで育てること、その環境を学校、保護者、地域、総がかりで整えていくことです。

委員からご指摘ありましたように、西根小学校の学童クラブと、それから、長井小学校の中央北学童では、一旦学校から下校し、新たに設置した入り口から出入りすることになっていました。体育館に移動するときも、学校内は通らず、一旦外に出て入ることになっていました。このことにより、確かに管理責任は明確になりますが、子供にとっての教育的な意義ですとか、価値から考えるとどうなのかなというふうに思っております。

市長が施政方針で掲げている多様性と共生社会の中で、子供たちは、これが、間違いなくこれから生きることになります。その中で、大切なのは、様々な環境の中で、様々な立場の人と共に生きていく。その状況を子供なりに受け止め、折り合いをつけながら考え、生活していくことだと思います。私はやっぱりそういう生き方を子供たちに学んでほしいと思っています。

そのようなことも踏まえながらのお答えになりますけども、致芳小学校内に学童クラブを設置することになった経緯も改めて教育委員会としての立場から申し上げます。令和4年度、コロナ禍における三密を避けるという目的で、学

校側の了解を得た上で、長井小学校、西根小学校における学童クラブの利用教室を非常に増やしました。これは、管理面の課題を超えて、やっぱり子供の命を守る、そして、子供の背中にはある家族の命を守るというために何が必要なのかというふうに考えての対応であり、学校からもご了解をいただいております。致芳小学校においても同様に、致芳児童センターにおける三密回避のために、まず、小学校の空き教室を臨時的に使用してきたものであります。これは、致芳小学校からの申入れもあり、実施に踏み切ったものです。

空き教室で学童クラブを実施した後のことですけれども、委員からご指摘ありましたような学校職員の業務面の課題が生じたという報告はありません。むしろ教員が勤務の合間に学童クラブの様子、子供たちの様子を見ることで、子供たちが落ち着いて過ごしやすくなっていること、また、学童クラブで生じる子供同士の様々なトラブルを学童クラブの方から後日連絡するというふうなことではなくて、その時々いただくことで、逆に学校の対応が翌日に持ち込んだり、報告とか、事実関係を精査するということがなく、非常によかったというふうなことであります。双方にとってもよい効果が生まれているというふうに私は受け止めております。

この取組の中で非常に貴重だなというふうに思うのは、まず1つは、委員からもありましたように、子供を真ん中に置いた環境の中で、子育てと学校という壁を越えて、共に育てることのよさ、また、課題も出てくると思いますが、それが共有されたこと、それから、やっぱり子供たちにとっては、学童クラブに身を置いたときのほかの子供たち、それから、先生方、加えて学童クラブの職員の皆さんに配慮するということが必要だということを学んできたなということです。もちろん管理面に関しては、双方で調整すべき点ってありますけれども、対象は時

間で区切られているのではなくて、同じ子供です。そういうことを考えたときに、過剰に管理面を気にするのではなくて、双方が歩み寄りながら、よりよい子供の居場所をつくっていくことを大事にしたいと考えております。

○平 進介委員長 10番、鈴木富美子委員。

○10番 鈴木富美子委員 教育長がおっしゃるように、やはり引き継ぎって大事だと思います。例えば学校さ来て、おなか痛くなったのに、学童さ行かんねということ先生から、歩いていく子供もいるので、直接、今回だったら、こういう子供、具合悪いんだけどということをしぐ伝えられることはすごく私はいいことだなと思っておりますし、よく私も学童に行くと、子供たち、けんかしてます、本当に。もしけがしたらどうすんだべなという思いもあって、そのときにやっぱりみんなで見てあげられるということは、これは本当いい、学校の中でやることはいいのかなって、最近ちょっと思ったりしております。それぞれの学童でやり方があるので、どれがいいとか、悪いとかということではないので、やはりぜひ子供を真ん中に置くということ、本当大事なことだと私も思いますので、大変、致芳小学校のあれはよかったかなと思っております。

最後の質問ですが、今の答えとちょっとかぶるようなことですが、一応質問させていただきます。

学童クラブは、異年齢児が集団生活する中で、子供の個性を大切に、基本的な生活習慣の指導や遊びのサポートをしております。今は家に帰っても遊ぶ子供もいない、友達も学童にいるといったような、学童に行かない子供はどうしても孤独になり、ゲームが友達になっているように思います。学童の役割の大切さを感じる一方で、地域や家族、特におじいちゃん、おばあちゃんも子供が成長する中で、社会との関わりとして非常に大事なことでないでし

ようか。家庭環境によって学童クラブを利用しなければならぬことはもちろん分かりますが、地域や家族との関わりも増やしていかなければならぬのではないかと感じております。このようなことは、教育長はどのようにお考えでしょうか、お聞きいたします。

○平 進介委員長 土屋正人教育長。

○土屋正人教育長 子供たちの成長にとって、地域社会との関わりというのは極めて大切だというふうに捉えております。これは長井市に限らず、今の子供たちにとって、子供と大人の関係性を閉じるのではなくて、より広く関係性を築いていくことは非常に大事なことですし、今の逆に言えば課題でもあるなというふうに思います。

昨日、第5回目の長井市内の学校施設の将来構想検討委員会が開催されました。その中でも、地域社会や家庭との関わりのおおきさということが改めて確認されております。これも将来の学校の在り方の大切な視点になるというふうに考えております。長井市では、この課題解決に向けて、学校教育だけでなく、地域づくりが中心となって、放課後子ども教室や土曜らんどの実施を通して、地域の子供を地域で育てる活動に取り組んでまいりました。これから求められるのは、子供たちが学校にいる時間や放課後学童、土日などで子供たちの活動を分けて考えるのではなくて、地域の中に子供たちの居場所を総合的に整えていく、先ほど申し上げましたが、この視点が非常に大事だなというふうに思います。

そのためにも、コミュニティ・スクールをより進化させたスクール・コミュニティ、この推進が必要だというふうに思っております。子供の居場所は、私、学校だけでなく、コミュニティセンターでもいいし、加えて、例えば今、先ほど話題になっておりますが、「くるんと」、これの多目的図書館なんかもそういう役割を果たせるのではないかなというふうに思っていると

ころです。将来的には、学校、学童、コミュニティセンター等の施設が一体となって、その場所で未就学児からお年寄りまで、一緒に活動したり、お互いに笑い合ったり、けんかしたりもいいと思います。そのようなことができる場をつくっていくことが理想だなというふうに思っております。子供がより広い関係性の中で育っていくことで、しなやかな心を持ち、成長していける、そんな子供たちをみんなと一緒につくっていきたいというふうに強く思っております。これは例えばですけれども、学童クラブの運営をコミュニティセンターが、その業務の一環として、例えばコミュニティビジネスの一つとして位置づけるということも選択肢の一つに考えられるのかなというふうに個人的には思っております。

教育委員会では、繰り返しになりますが、来年度の重点にスクール・コミュニティの形成に向けて、実現すべく、関係部署と連携しながら、子供を縁としたコミュニティづくりに取り組んでいきたいというふうに考えておりますので、今後ともいろんな意味でご指導いただければありがたいなというふうに思います。

○平 進介委員長 10番、鈴木富美子委員。

○10番 鈴木富美子委員 やはり核家族化になったことによりまして、家族の絆だったり、地域の人たちとの関わりが本当に少なくなっていると感じてます。今私たちも65歳、70歳まで働けよという世の中なので、孫を見られる時間も少ないかなと思っておりますので、ぜひ子供たちに少しでも地域の方と触れ合うような、教育長がおっしゃったように、コミュニティ、コミュニティセンターなど、本当、年寄りの方もやっぱり子供といるとすごく元気がいいんです。そういうことをみんなでやっていたらいいなと、具体的にはちょっと分かりませんが、これから皆さんで話し合っ、みんなで、地域と学校と一体になって話し合っ、少

でも子供を一人にしないというか、心豊かな子供を育てていていただければ、長井さ、帰ってくるんじゃないかなと期待しているところです。それも含めまして、学童クラブの大切さをこれから一緒になって考えていきたいと思しますので、今後ともよろしく願いいたします。

学童の質問は以上いたします。

続きまして、2款1項6目企画費、011オリンピック・パラリンピックホストタウン事業についてお聞きいたします。

ホストタウンスポーツ交流事業委託料に700万円が記載されてますが、どのような事業に関する委託料なのか、総合政策課長にお聞きいたします。

○平 進介委員長 渡邊恵子総合政策課長。

○渡邊恵子総合政策課長 ホストタウンスポーツ交流事業委託料700万円は、今年度に引き続き、長井マラソン大会にタンザニアからマラソン選手団を招致するために必要な予算です。事業の実施に当たり、今年度は、選手団の旅費や通訳の謝礼、また、マイクロバス借上料など、必要な経費をそれぞれ節ごとに予算計上をし、宿泊施設の確保から車両の手配に至るまで、選手団が滞在するために必要となる多くの業務を職員が直接行っていました。来年度は、これらを業務委託することによって、職員の負担を軽減するとともに、より効果的な事業となるよう、職員が本来直接担うべき業務、例えばですけれども、市民とタンザニアの選手団の皆さんが新たに交流できる場をつくったり、また、その調整などに当たったり、そういった業務に傾注しようとするものです。

事業の中身としましては、基本的には、今年度と同様、タンザニア選手団の皆さんに長井マラソン大会に参加していただいて、大会を盛り上げていただくということを想定しておりますけれども、今年度は、コロナ禍の影響で市民との交流が制限された部分もございましたので、

可能であれば、以前のように、市内小・中学校の訪問ですとか、そういった市民と直接身近に触れ合えるような交流なども実現できればいいと考えているところですが、詳細については今後検討していきたいと考えております。

○平 進介委員長 10番、鈴木富美子委員。

○10番 鈴木富美子委員 そうしますと、詳細はまだだということですけど、大体何人くらいの選手を想定してらっしゃるのか、今の段階で分かりますでしょうか。

○平 進介委員長 渡邊恵子総合政策課長。

○渡邊恵子総合政策課長 この予算の積算につきましては、基本的に今年度の実績ベースで予算を計上しておりますので、今年度の実績でいきますと8人程度の選手を選手団として招致するというを見込んで計上したものになります。

○平 進介委員長 10番、鈴木富美子委員。

○10番 鈴木富美子委員 次に、副市長にお聞きいたします。

今回、タンザニア連合共和国に訪問なされたわけですけども、目的は何だったのか、教えていただきたいのと、来年度以降のホストタウン事業につなげていこうとされることあるのかなども含めて、お聞きしたいと思います。

○平 進介委員長 齋藤環樹副市長。

○齋藤環樹副市長 このたびのタンザニア連合共和国の訪問につきましては、JICA、国際協力機構からタンザニアで開催されます女子陸上競技大会、レディース・ファーストへの招待を受け、実現したものでございます。

JICAとの交流、連携につきましては、2016年の12月、タンザニアのホストタウン登録に当たり、本当に多大なご尽力をいただいたことに始まっております。以後、長井マラソン大会への後援やレディース・ファーストに出場した選手の長井マラソン招致など、多方面にわたりご協力をいただき、現在に至っております。このレディース・ファーストという大会ですけ

れども、2017年に、3つの目的がありまして、一つはジェンダー平等、一つは女性の能力開発、それから、スポーツの振興、この3つをテーマに、女子にも男子にも同等のチャンスが与えられる社会の実現を目指しまして、JICAがJICAのタンザニア事務所広報大使のジュマ・イカンガー氏と共に立ち上げた大会でございまして、今年4回目を迎えました。この大会をぜひ視察してほしいと、昨年11月にJICAタンザニア事務所から市長宛てに申出をいただきました。長井市としても、タンザニアとの交流をさらに深め、JICAや現地競技団体との連携をより強固にする貴重な機会と捉えまして、私が市長の代理として訪問することになったところでございます。

何をしてきたかということをおおしと触れさせていただきますと、まず、このJICAの要請でございましたので、旅費、あるいは滞在費は全てJICAで負担をしていただきました。それから、大会は1月の21日、22日の2日間、タンザニアのダルエスサラームの国立競技場で開催されました。私は開会式で挨拶をさせていただき、それから、観戦をし、それから、来賓として出席されたタンザニア・コミュニティー開発・ジェンダー・女性・特別グループ大臣、女性の方ですけど、それから、タンザニアの国立スポーツ協議会の幹部の方と面談などをさせていただきました。それから、初日、1月21日の夕方には、JICAのタンザニア事務所の夕食会ということで、意見交換、それから、翌日、22日には、在タンザニア大使公邸での夕食会ということで、ウガンダ共和国からいらっしゃった副大臣とか共々、意見交換、懇談などをさせていただいたところで、翌日の1月23日には、JICAの事務所で、イカンガーさんと、それから、マラソン選手のシンプさんと意見交換などをさせていただいたところでございます。

感想なども含めて、もしよろしければお答え

させていただきたいと思いますが、私、60歳過ぎて海外旅行初めてだったので、ちょっとお上りさんの感想から申し上げさせていただきますけれども、やっぱり一つは、地球の規模感というか、スケールを実感したところで、今回は成田からドバイ、そこでトランジットをして、ダルエスサラームということで、成田ードバイが8,000キロ、ドバイーダルエスサラームは4,000キロ、1万2,000キロということで、飛行機に乗っている時間が17時間ということで、改めて地球の規模感を実感しました。

あと、2つ目ですけども、地理的目線の話なのですが、私、個人的に、人間の物の考え方とか行動原理に、地政学とは言いませんが、地理的環境が影響しているなど常に思っていたんですが、タンザニアで、ホテルでニュースを見ておりますと、衛星放送、ヨーロッパの放送しかなかったんですけど、BBC、あるいはフランスの24チャンネル、あるいはCNNというところで、ニュースとか天気予報を見てたんですが、それから感じたのは、やっぱり欧米人の地理的目線というのは、北米、ヨーロッパ、アフリカ、中東、ミドルイーストまで、その辺が地理的目線だなということを感じました。日本というのは、本当に東の外れのファーイーストという感じを改めて実感しました。

それから、3つ目ですけども、タンザニアの政府開発援助、これにつきましては、JICAは長年、農業や運輸、交通、保健、教育、都市開発など、きめ細かに行っていますが、中国ですね、ビルや道路、その今回の会場となった国立競技場も中国が建設している。それから、ダルエスサラームの市街地からオイスターベイという比較的リッチな人が住む地域、海に架かる橋があるんですけど、それは最近、韓国の援助で大変立派な橋ができておりました。こういうところを見ますと、改めてアフリカにおける外交のせめぎ合いというか、そういうところも



感じました。

それから、4つ目ですけども、スポーツの力というのを改めて実感しました。今回、レディース・ファーストは、タンザニアの50の州からそれぞれ代表の選手が出てます。キリマンジャロとか、ドドマとか、アルーシャとか、ザンジバルとか、そういったところで23歳以下の女性選手が参加しております。レベルはピンからキリなのですけど、本当に1万メートル、5,000メートルの選手については、日本のトップクラスに遜色ない気力で走っておりますが、人によってははだしで走っている選手もいます。でも、ひたむきに懸命にプレーしているということで、非常に共感というか、感動というか、一体感を感じました。イカンガーさんがスポーツは世界を一つにできると、政治にはできない外交をスポーツはできるとおっしゃっておりましたけれども、改めて実感したところです。

あと、もう一つは、タンザニアは女性の社会的進出が非常に進んでいると。大統領も、先ほど申し上げましたコミュニティー開発・ジェンダー・女性・特別グループ大臣も女性でございます。快活でエネルギッシュと。タンザニアの主な企業の女性管理職の比率は日本より高いということで、田舎のほうはなかなか男女不平等ということはあるんでしょうけども、日本もおちおちしておれないなというようなことを感じました。

それから、やっぱり仕事でも交流でも、パーソナルな関係、これが大事だなと。面談などした際には、一緒に行った職員がけん玉の技を披露しましたが、けん玉の技を披露しますと、一瞬にして場が和むということもございまして、なかなか人と人との関係性が基本だなということを感じました。

最後の感想なのですが、行くときに飛行機で成田、新潟上空、仁川上空、北朝鮮かすめて、北京上空、中央アジア、あと、イラン上

空を通過してドバイに行きましたけれども、中央アジアからイランに左に曲がるときに、立体的な地図の上にディスプレイが出ますので、遠くに黒海とクリミア半島、見えました。まさに今国際紛争の舞台ということもありますし、タンザニア、ダルエスサラームで肩掛けバッグは駄目だよという治安の問題とか、そんなことをいろいろ感じて日本に帰ってきますと、日本という国の立ち位置といえますか、国家主権に守られているなということを感じたところを成田空港に降り立って改めて感じたところです。

そんなこともございまして、このたびの訪問をきっかけに、ホストタウン事業で結ばれましたタンザニアとの絆をさらに深め、今後の交流につなげていきたいと改めて感じたところでございます。

○平 進介委員長 10番、鈴木富美子委員。

○10番 鈴木富美子委員 副市長におかれましては、大変すばらしい経験をなさったのではないかと思います。やはり海外に行ったら、私たちがいかに小さいところでもがいているのかなという思いはすごく私も行ったときに考えさせられました。

シンプ選手ともお会いになってきたということで、この間、大阪マラソンで第3位か何かに入られましたよね。だから、長井のことは何か話、どんな感想持ってたか、話してこられたら、教えてください。

○平 進介委員長 齋藤環樹副市長。

○齋藤環樹副市長 先ほど申し上げましたように、タンザニアを訪問したときに、シンプ選手とイカンガー選手と一緒に意見交換をさせていただいた際に、今度、大阪マラソンに参加するということをシンプ選手がおっしゃっておりまして、じゃあ、ぜひ応援に行きますということをお話ししてまいりました。実際、応援に行って、レースの前日にお会いして、長井アスリートクラブの皆さんからの寄せ書きをお渡しをして、励

ましたところなのですが、社交辞令でなくて、本当に来てくれたということで、大変に喜んでおりました。そのせいかどうか分かりませんが、レースでシンプ選手は2時間6分19秒、自己新記録を更新して、優勝した選手と18秒差の3位ということで、銅メダルを獲得しておられました。レースが終わった後、夕食を共にしたんですが、お疲れだったとは思いますが、寄せ書きを寄せられた子供たちに、一人一人、絵はがきを用意して、サインをして、メッセージを書いていただきました。それを持ち帰って、先週あたりですかね、子供たちにお渡しをしたと。大変心温まる話だなど、自分で言うのもなんですが、思ったところですよ。長井のことについては、長井マラソンのことも鮮明に覚えておりますし、大変よくしていただいたと、非常にいい印象を持っておられました。

○平 進介委員長 10番、鈴木富美子委員。

○10番 鈴木富美子委員 大変すばらしい交流ができたんだなと思っております。ありがとうございました。

最後に、市長にお聞きしますが、オリンピック・パラリンピックのホストタウンの縁で、オリンピックが終わってからもタンザニア連合共和国と、この間やってきましたザンジバル野球チームやマラソンで交流ができていると思います。日本とタンザニア連合共和国は遠く離れておりますが、今ではオンラインで交流もできるようになりました。これまでの交流を今後どのように発展させていくのでしょうか。今までは行政が主導してここまで実績を築いてこられました。今後は一歩進んで、民間レベルでも交流の場を広げていければと考えます。野球やマラソンといったスポーツの交流をきっかけに、産業面での人的交流や交易など、もちろん今の段階では夢のような話かもしれませんが、今後のホストタウン事業の方向性として、市長の考えをお聞きしたいと思います。あわせて、リヒ

テンシュタイン公国との関係もどのように考えていらっしゃるのかもお聞きしたいと思います。

○平 進介委員長 内谷重治市長。

○内谷重治市長 お答えいたします。

ただいま副市長から詳しく感想などを交えながらタンザニア連合共和国の日本人から見た感想などを詳しくいただきましたけれども、私も2回、うち1回は一緒に行ったわけですが、大変、国民性がすごくいいなというふうに私は思っております。日本人とうまくこれからパートナーとしてやっていける人たちだなというふうに思っておりますので、そういった意味では、このたびのホストタウンの事業終わったら、あと終わりということはなくしたいと考えておりました。

平成28年の12月にホストタウンの登録以降、相互にとっても向こうはスポーツ関係の皆さんしかこちらには来れなかったわけですけども、交流の輪を広げてきたのは確かであります。私どものほうからも、日本からタンザニア、ザンジバルに渡って、大変活躍している島岡さんなんかの仲介もあって、野球やら柔道やら、様々なスポーツを中心とした若者の交流が少し行われましたし、こちらからも中学生2名に市民訪問団の皆さんと一緒に行っていただきました。今年度は、先ほど言いましたように、シンプ選手のお話があったんですけども、長井マラソンにタンザニアの選手団を男女、招待しまして、そのシンプ選手が大変活躍していただいたというのは大変うれしく思いました。

全国的に見ますと、東京2020のオリパラのホストタウン事業は、オリンピックが終わって、もう中止、終了という自治体が大部分のようでございますが、こうした私ども長井市みたいな取組をしていることは誇れるものだと自負しております。今やっぱり大変なのは、交流するための財源というのは非常に多額になるものから、そのところを例えば地方創生推進交付

金、今はデジ田ですけどね。それから、宝くじのtotoなどを利用してやっているわけですが、今後も何とか財源を見つけながら、交流したいと思っております。

その際には、JICAの皆さんがもう長年にわたって、海外青年協力隊とか、あとは、一旦リタイヤした人たちの壮年の協力隊の方もいらっしゃいますよね。それで、委員からは、産業面での人的交流とか交易という話でございましたけれども、なかなか、いわゆる日本と産業的なつながりといった場合は、一つは向こうの産品、あるいはこちら、日本のものをお互い貿易によって交流・産業振興に協力し合うというのも一つありますし、あと、もう一つは、日本の製造業あたりで人材が不足しておりますので、例えば研修生として国の制度を使って向こうから、製造業、あるいは、農業もJICAの協力隊の皆さんで、キリマンジャロの残雪の水を、融雪、水を使って農業をしているわけですよ。米作りをしてまして、それは、YBCの「ピヨ卵」でも紹介ありましたが、手塚さんですね。それから、多田野さんとかが一緒に行って、向こうの野球チームの訓練をしてあげたり、あるいは、多田野さんは農業の米のことなんかも、米作りとか、いろんなことを向こうとちょっと可能性なども探ってきたということで、農業の研修生ももしかしたら受け入れられるのかなというふうには思っています。

その辺のところをやはり私ども、頼るのはJICAさんと、あとは大使館のほうからも助言いただいて、あと、貿易でしたら、やっぱりJETROさんなどからも助言いただいて、可能性を探っていきたいと。やはりちょっと大変なのは、遠いですので、実際、人の行き来をする場合は非常に運賃がかかるというか、それは交通費がかかるということで、そのところはオンラインとか、そういったことでもできるんですが、その可能性を探ってまいりたいなというふ

うに思っているところです。

一方で、リヒテンシュタイン公国につきましては、すぐ近くにドイツのバートゼッキンゲン市、そんなにかからないですね。車で2時間ぐらいの距離なのですね、非常に近いんですね。それで、バートゼッキンゲン市の長井との交流の組織があるわけですけども、あるいは、日本人のリヒテンシュタインの日本人会みたいな、そういったところとの話合いの中で、ぜひ交流をということで、これはタンザニア連合共和国もそうなのですが、国と付き合うって、なかなかタンザニアの場合は6,000万人ですから、ちょっと我々にとっては非常に負担です。それで、以前、TICADって、横浜でアフリカ開発会議があったときに、私、外務大臣とお会いして、そのときに、タンザニアのどこかの市と姉妹都市で交流続けたらいいんじゃないかという提案をいただきました。その辺なんかも、日本の在日のタンザニアの大使館通じて、少し探っていますが、やはりリヒテンシュタインも日本人会のほうから、ぜひ、3つの市があるんですね。小さい市です。うち以下ですね、きつとね。2万人とか、1万人台の、5つあるのか。(「5,000人ぐらい」の声あり)

○内谷重治市長 5,000人か。そのぐらいの全体で3万5,000人ぐらいしか人口がいませんので、そういったところと交流したらどうかということも言われておりますので、リヒテンシュタインについては、タンザニアとは距離があるんですけども、たまたま今年、姉妹都市の40年ということで、バートゼッキンゲン市から招待をいただいておりますので、そのときに市民訪問団なんかも一緒に参るつもりですが、ぜひそういった経済的なつながりなども関心ある方などもお誘いをして、リヒテンシュタインまで足を運べたらいいなというふうに思っております、その中で、可能性を探りたいと。

リヒテンシュタインについては、非常に経済

的には豊かな国ですので、いろいろな私どものほうからあまり経済的な心配をせずに交流できる国かなと。ただ、タンザニアの場合は、やっぱり配慮しなきゃいけないなというふうなことで、財源とか、やり方については、今後いろいろな、議会を含めて、助言やら、提案をいただいて、交流を続け、なおかつ、経済的なつながりも、あとは、子供たちの交流などもいろいろ検討したいと思います。

最後でございますが、オーストリアとの関係で、パラリンピックの事業で、那須塩原市、那須塩原市は、この間も市長と、渡辺市長と白金台の八芳園の80周年の式典に私も彼も行って、一緒にお祝いの挨拶をさせてもらったんですけども、そういった国内の自治体との関係も多分あると思いますので、そういったことにつながりやら、あるいは、リヒテンシュタインの場合ですと、ラインベルガーという非常に世界的に著名な作曲家がいらっしゃるんですけども、リヒテンシュタインの方なんです。そのラインベルガーの曲を日本人はかなり歌ってるということですから、そういったことも含めて、文化的な交流などもできるのかなと。多方面、多角的に交流を検討してまいりたいと思いますので、ぜひ今後ともご指導くださいますようお願いいたします。

○平 進介委員長 10番、鈴木富美子委員。

○10番 鈴木富美子委員 いろいろせっかくの機会をやっぱり捉えて、今後の長井市にとってもプラスになるような交流をしていけたらいいと思います。

タンザニアに行った中学生お二人ですけども、もう大きくなられまして、ぜひ外国と日本、長井市と結びたいという学校に行くと、北中のご卒業なされた子供さんがこの間お会いして言っていましたので、それもタンザニアに行ったときのイメージがあるのかなと思っております。やっぱり子供たちも機会があればぜひ海外に連れ

ていかれるような施策も必要でないかなとすごく思ったところです。

これから、やっぱり国は遠いんですけど、今、市長の話の聞いたら、いろんなところで、国内でもいろんなことを考えてらっしゃるということということで、財源を確保しながら、ぜひ国際交流のほうにも力を入れていただければと思います。

以上で質問を終わります。

### 内谷邦彦委員の総括質疑

○平 進介委員長 次に、順位3番、議席番号7番、内谷邦彦委員。

○7番 内谷邦彦委員 政新長井の内谷邦彦です。明確な回答をよろしく願いいたします。

最初に、6款農林水産業費、1項農業費、商工振興課分、103、6次産業化推進事業22万7,000円について伺います。

令和4年度の予算が33万7,000円、令和3年度の決算では20万1,380円となっております。令和3年度には6次産業化商品開発費15万円、実績数3件となっております。また、令和2年度には6次産業化ブランディング企画運営業務委託料として154万円、市外販路の獲得に向けた戦略的な試験販売等の業務を実施する予定であったが、コロナ禍の影響で、事業実施が困難となった。そのため、アフターコロナを見据えた市外販路への提案コンセプトの策定を売り先と協議して進めながら、事業者の商品開発や商談等の個別支援を実施したとしております。

今回、ようやくコロナウイルス感染症に関する規制がなくなりつつある中で、令和2年度に行ったアフターコロナを見据えた市外販路への提案コンセプトの策定を売り先と協議して進めながら、事業者の商品開発や商談等への個別